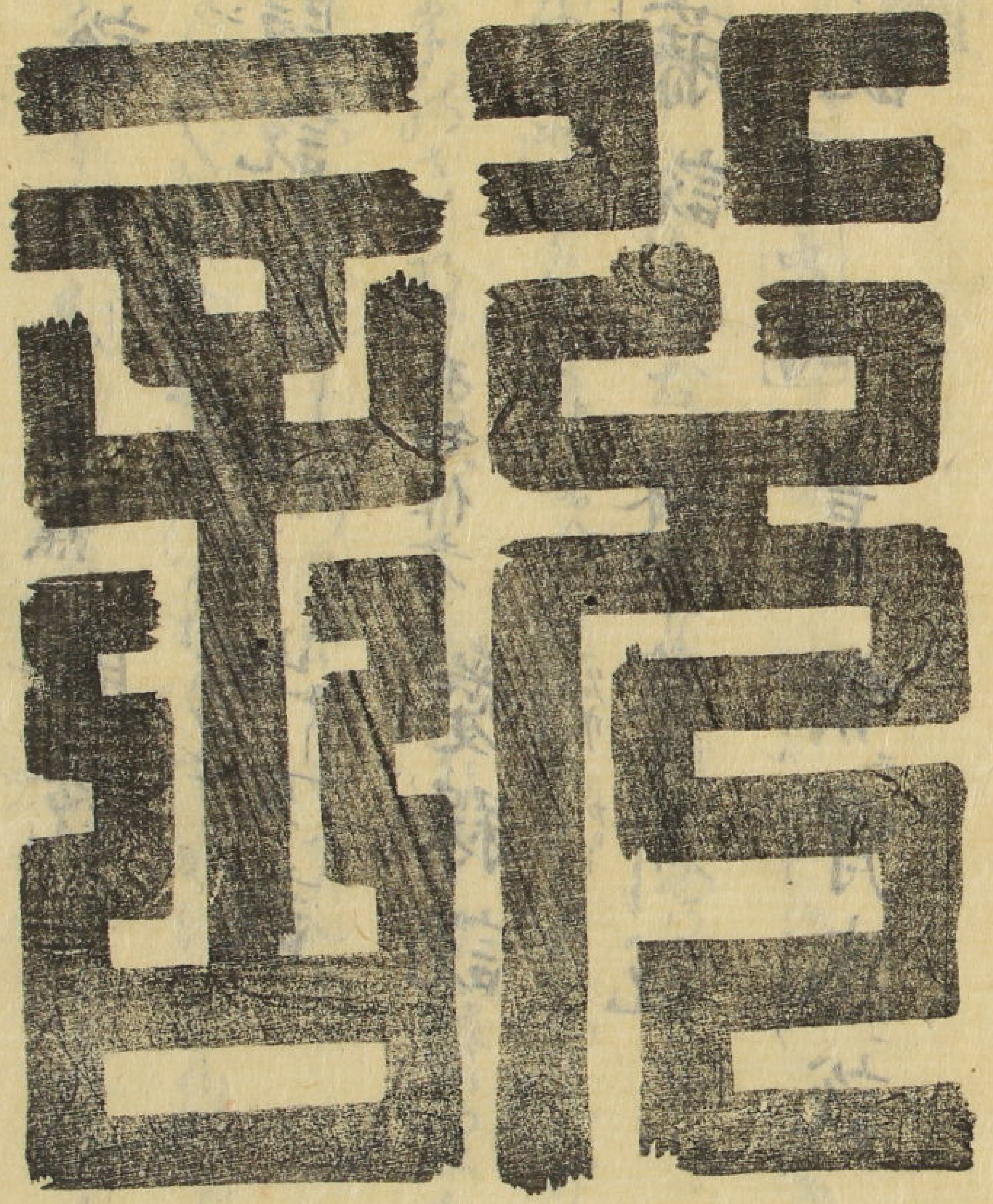
風俗文選

賦　譜

三

へ 5
5610
3

5610
3



昭和十六年一月十一日寄
尾野貴英氏贈

門へ6 號5610 巻3

蓑虫説 素堂
柴売説 凡兆
閑闊説 芭蕉
師説 許六
名阿段説 許六
出女説 木導
雑説 不知作者
愛騾説 万子
艸字藤説 朱廸
草苅説 露川
山芋説 吾仲
嘲霄感説 毛紈

京都帝國大學圖書 〔印〕 類

風俗文選巻之四

五老井 許六 選

蓑虫説

素堂

みのむし〳〵声のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよと
なくは孝に鳴なるをあはれぶ。いかに伝へて鬼の子なるらん。
清女が筆のさかしきにや。よし鬼なりとも瞽叟を父として
舜あり。汝むしの舜ならんか。
みのむし〳〵声のおぼつかなくて。かつ無能なるをあはれぶ。
松虫は声の美なるがゆへに籠中に花野をしたふ。桑
子は糸を吐くにより。からうじて賤の手に死す。
みのむし〳〵無能にして静なるをあはれぶ。胡蝶は

花よりこそ蜂は蜜をもとむなれば淫羊藿ならや、
なからんぞ誰かおもひの種をあやうしとせんや。
一 この世にしたしきかなる物は一滴をも
まいらせぬ身を人のほしき物をもらひてこれをおすゝめ
たま物は蛇蛇ありきはひあるものは人のおもひに身を
そこなふ志しめがすこしきなるにはあらじを、
一 蓑虫は漁父が一条をたれてさらに回し漁父は魚
をまねきて浪の魚にて幾ばくとかしこき酒に身を
ひとしきを公する文王を釣の縁あり子陵も漢王に
一味の宗をさまたげしぞ。
一 みのむしは虫ながら雅ぬけしをも田蓑の縁の名なり

かゝる物をやいまぞはじめて誰ぞよひなりけんとおもふにて
きくところは魚は又深く入海の底の蓑をも蛇はわし
もとよりは手を拾はれぬさる也。
一 蓑虫は其を柳にとりつきそめしよりは楼が霧にすがり
て宮の中の心を起し蝶は萩にて風に身をまかせて蘚苔に
風をこゝろむとかゝしの様は空蝉に身をなしたる
殻も形もたるまゝ見るにや。

又以男文字述古風

蓑虫之謂 落入聰中 一絲欲絶
寸心共空 似寄居獣 無蜘蛛工
白露茸台 青苔粧躬 従容侵雨

飄然乗風　棲鴉莫啄　家童禁叢
天許作隠　我憐称翁　脱簑衣去
誰識其終

柴賣ノ説

丸兆

柴賣ハ洛の北。小野。細河。くらま。高雄あたりに是有。小原ハ花盛も桜が細ふわり先おりし。涼しき業ハ[illegible]竈に折くべくといへるにぞとめるあまりはおのまゝなりしんかの秦の毛女が嬰にも比べ河陽の焦子が仁にもあらまし。唯世に深き里人のならはしにて女を誰かおろくこの薪を賣吏は山に入くこ薪を樵る。或は[illegible]せども遠く。足を汲に深

きともよ白し。されば建礼門院の女房。阿波の典侍の君などいふ人の名もおもふにや。あはれきびしくへらぬ。古し香もゆかしき衿をはくろひ据しめて二布をあてりしが。昔いさゝか志賀きはげき。何を[illegible]しく[illegible]むすびさげ。幾男の[illegible]手。笄も虎杖をするがごとし。ひとしの山ばかりならぬただのほど一里二里。ととくて三里ばかりて肩にせる業もなく。我の腰にまで膝をもかがめ。衛家の門をりげおもての面のみならずも。ちぎりて大路小路にと高。武らでおろしして門をさけ。あるひは出口の市にも来を志賀ぐつて。小鍋の前をとて啼。月の夕もつまをわくま

たゞ西施が面をまもりてたゞ一門のみに遊居にくつし矣
とゞむるをさびしにあらきに東坡翁の笑ひぐく曰男お
ほしき時ハ官女もかまはらひぐくしに仏ハ泥をえ
らぶ傾城もお法にしたがふべし。色ハ妹背をなさむや
はなるゝとなむとてつねる太に乱れもなきこと譬
ごとし。

閉関説

芭蕉翁

色ハ君子乃にくむ所にして。佛も五戒乃はじめに置けりといへどもさすがに捨がたき情乃あやにくにあはれなるかた〴〵もおほかるべし。人志れぬくらぶ山の梅の下臥にもおもひの外乃匂ひにしみて忍ぶの岡の人めの関も守る人なくハいかなるあやまちをかしいでむ。あまの子の波の枕に袖しほれて家をうり身をうしなふためしも多けれど老の身乃行末をむさぼり米銭の中に魂をくるしめて物の情をわきまへざるにはるかにまして罪ゆるしぬべく人生七十を稀なりとして身を盛なることはわづかに二十余年也。はじめの老の来る事一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくよりあさましうくづほれて宵寝がちに朝おきしたる寝ざめの分別なに事をかむさぼる。愚なる者は思ふことおほし。煩悩増長して一芸すぐるゝものは是非

の務るは也是をもれ世のいしなることにあれて。含胸器
は魔男は心を怒し。溝洫はおほまえくはなはず露る
消し。蘭華老他の唯利害を破却し。老荘を見ん
まて開はなるむきる老の學をふり。入て高作に安置
の兵あり出らくハ他の史學業をさかのぼらんことし
そる教が人を閉て杜あ白内が門を験さむともハ安あるを
なとし。貪を富つとして五十年の積ま自書が行
この禁戒となれ。
錦ではや、直をハ験おる此門の植

師説

許六

それ人学ぶには必師あり。師は道を伝へ業を受
惑を解ものなりとき物ところにあらず。師なるもの
そうしてつきのともまして昔ある世にしはわさる事し
ときに佛菩薩神仏の者をなむし。唯一乃師
ありて道を教ゆるも退之がいひおかれしも能るをいふ
乃はわが西行とゆゐるそもくまる神仏に日に本を
ろへ佛法を見そしはさらむけしては和歌の風儀をまなぶ
果を得らしは大黒をのをあらはれ神世をむらひ
を冥の棚に志を入りましはかとそることに和歌の教

道の賊とハいふべし。なんぞ當世俳諧乃師たる人を
見るに大抵は門をとぢ机に倚り議論を弄して貴賤をあつめ利
益を説て家を富すことを好子としたる名をとりたれたり。
秖よなびて遊樂にくるまるを恥ざる人あるハ是非もなし乃
淵流よりいはく遊興を貪り面をさらし果てハ物事かなはぬ
人又ちかあはうの子弟乃輪を乃もし其父母の甍をつけ
てなみ多くの若れしも利養をしし去山姓法師が
つれづれ草をひきて示しにいひけるハかゝる源ハ求むべきかも
志ならずや何其寺の新發意ともいふべし
なるべし一旦に師の道にも所にも世を渡る
はすまじきなり。巫醫樂師百工乃師を求むるにかはらぬぞ。

又ちかごろ蕉翁の名を借謗り識す。讀書に職乃所にある人
おのれせぬ意つきまとひ出世乃師を先達といふ。
爰に其子を強力と名付け法花の師なる事をも察すべし
其子を集めるとハいふなれど俳諧富士乃禅機の
人を法師といふハいかなるゆへの志しるしもよき道を業とを
教へるに仁ともいふとハかくこそ是我が意の寄りなき物を感じ
て二条寺尚乃使を待。無益乃金ほしがへ乃刻付
もうらせるに繪乃摺物を茶人へ遣さしなら
茶を慰しいざさる世の風俗にして教ゆる人をもめるとぞ。
ましてや道人も拘ねるがなし。ここで小俳諧の師たる
ある。翁の流老人よりはじめて翁の宗匠をすすむるとなれば花の

至こゝを継これを天下の宗匠といふにならし。その祖よりは厨子
小説にまじはりて看板をかけてあさましき道を説て宗
匠めくをも拾つゝ一たび一風の宗匠ありて奥の花のおく
をひらきし先師芭蕉翁ひとりに其意を活かは世帯とく
これを受ずらひを解。これを真の宗匠といふなり。
今の人はいはゞ人をみるに一生師と頼む人もつてむじ見
取ずるも人の人其似ありて翁の人を家にまわり偏にひとりわ
惑ひは不丈なるを立らるゝ。人ゝ生まさなりし志のよし。
師はさらひて惑を解。師の説よりし人をも自己の
善悪を究治るを知るゝも師をもとめてすとも解
二ゝ世の長始をへねまじと師の弟子の口中を知て

やゝおわかいら道を継す者の門人それとなるべくてこれ
血脈道統あまとして此宗匠の宗匠遠るといふ是神真の
石流あるらめをもとるじでまんの俳諧をたてんとおもはゞ
先真所の師の心を見るべし。真の俳諧一人あれども
一派すべて道に迷ひて神言下に惑を解てあら無
ら偏しと示しぬ在なれ故に孔子孟遠。家にまさ
ぶひてにをちかうの人と逐友楼急命におつるが故。
流衙花裏の床にまたやまとて其人まことなる事の稀也
今の世はいはゞ師の説他につく道るゝはかなるも家が俳諧の
みゝとえにも知て家がえんひらいの其ふとまよひにするは迷ふ
まことの言眼に座の師あるべくもやり宗

かへてもりくまさへゆべし。

名ハ阿段ニ説　　許六

○唐太宗のときよりあざなをつけて。文字の唐を帰しけるを杜
李斯が子孫とハ皆其名にて通字ありて己乃己
とも又いひしより名ハなくても事ハ闕まじくや。
名乗乃名は世にある人ハ一字もあるまじ。されバ味噌摘
にも風流もせずして風摘に頃をもちぬる事も无し。只
ありがたき名目にあらずや。さるを今乃人名を
天地乃おもむきをさへ五音にあらざるとおもへるハいとあはれ也。
事ふる名をあらためしも明日をも見聞させけるにや。是

乃名ハさも呼べき人とハ見えざる。教識とハ顕密の名。
鉄巌とはじめてとなへまいらせバ。禅師乃号大むね一流一流の
名目あれども其の後乃人の名はかく甚深の心なし。
歓を殺して弟子乃名とし白藤を呼て其名を
宗とせり。さればたゞ一字のつけ方に。あるひハ心をよくめぐらす寺本
端乃類も。漸くにしてあれ。一笑志計もありける事
なし。小坊主阿段よく業をたのむ。吾が渇をさゝず。
杜子が撩奴に等し是非ハ名はよく説はうれて
かやうにする事ハかく訝べし。

出女説

木導

須賀須賀とは。庭人乃へ伝ふる名にして。白拍子なが
れ乃女なり。家路乃やりてぎなるべし。着よりは類あ
まり。かぞふれば田なりけん。出女乃名目当世の洒落(シヤラク)
柄杓(ニヤク)。干瓢(カンペウ)。白人中居乃そしりは。大むね千種にわかれく。
位階のこゝろ下は全躰の出端なるべし。せられしかしくも
して勤様によりてさ様。若人のかつくりにはなれる中へ
へ而や。か子細(チト)ありて。おぼくはふるさと小筥共とも。夜に道人
がまおり遊君ありて。誠に人乃魂をとろかしぬき乱(キ)ば
きつくし沈ましてふ所よむ程の意をそもなし。さうで知らひ。

酒乃こゝに洗進退のやまれぬには。必ずしも和光同塵(ヂン)乃
恋をあらし。慈悲は肖上乃お女ともいふもなければ。信生(ツラク)
波のあはれさまをとゞむるに。旅をたのしみ旅客の費とも
さ見し。女ら乃花の出すくひともあらで。江湖分勝乃花
坊主を茂さむとしは。あるは的立乃旅人を送つて打発(ウムトキ)
姿をぬぎ捨ぐは。幕(ハバキ)を飛(ト)し。節(シリ)ひとつにおりしひく
きてとりや。やがて衣(キヌ)引つけ。年寝(タモ)の裳をさしめ時も。膝の
臓(ヘルゴ)を相蓄(アイツ)ともおもへつゝ。ぼ手の塗(ヌリ)膳(ゼン)にすりわかう。
通つての書(ムコカタ)まて三条をかはし。世わしく豆乃日ごしに秘
やまかしやくは。見世乃こゝ西に座をきめ。治まし他乃人も
面肌(キロハダ)ぬぎ乃大きいふ肩輪のあさなわ。燕八群ある

また京氣なり。目さむる心地ハせられ侍り。関札の比つらね
うきてハ。あさましき豐嶋に。京藤の莖むすびさげて繁
乃あれたれまふハ宿なかり。門の柱よりうち添ぬたるハかまへ
世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりて。いかぞめれ仕合
まうんもあらはれと。かれ女ぼうえ中ら枕傳る。あるハまさ
ましき鏡を川てふなふまうら同心乃灸のねさつけ
以へ。使鼓乃手勢にて輕忽の声を上く。兎角
まとろへ池大かよる指をぞのりはかれぬなま
なるべし。青夫に塗木履をはづして。息用にハ赤脚
て飛。御流。器済乃金盥もむりしになれ果。姫女熈にか
うきは世されけり。これ沙汰もなし。と終りしの楓指ハ

月落烏啼乃吟も。此君に逢ハぬうらみをのべに侶
おはす。宿かさぬ君もなくあまて今ハあらじ乃あれハ
なりぬ。伊勢路乃難色ハあらぬかぢもせて大津鳥羽
そかしうれ隋べし。名残乃まがうなる此ハ。川と
なしよ果く。皇乃下の燥宇も寒く。衣締不
乃小車乃音も。さびしく菅て西風呂の火影に足
袋さまざまを倪し。囲みハ涼しく。喪
勤もせんさ。神とあハ称なりけるにハんひるなし。
夜更志づかれぬを追ひわ志のびやかに書流
床乃小隣にあきて神乃瑞籬もちりつまたなくて
大殿にまうへ。終に一夜の枕をかりふ。此智ハ節の巻

を定め。給分の加増ハ永代の宝をとぐ所。極楽絶つてある
だ。鳶も鷹にハならぬもの。所詮何ほどかならん。
有ハ普賢ぼさつもなかなか生死の海もあまじ。今
さすらひ遠ひありて。果ハ駕籠舁の畜生にわ
痩子あまた産み。燗鍋の日々へ。生涯を終る。
本来とても是非なし。縁座の地獄までハあまたと。
ある女乃地獄の沙汰さきんじ。生きてハ方地獄の門くぐる
ならしもぞ。又あり徳なかるべし。

雜説

不知作者

○人ハ物貪欲ハ。其人ハ独貪欲の拙にかなる所に(倍ま)。
山川草木ハ。其山川草木のまゞ徳ある所に足ぬ也。
物皆それが為の其身の分限なる所に。在ぬ徳果るも衣
なるでなるべし。愚鈍なる者ハ無為に倒まし。仕ル者ハ
仁義にそむくる。荘老ハ窮元に有まし。神仏ハ霊異に
倒る。伯夷叔斉ハ賢にまよふ。楠正成ハ忠に倒る。
火もあつきにたつし。我ハひやゝかなるにかゝる。所謂
是あまりにすぎにる。野老ハおがむにまよふ。長ハあがれに
るゝ。貌ハこころもちに倒る。されバ瘡をも悲しむ人
を痒きにかなしむ。食をむさぼる
盗賊の難を見るも其つみ是皆私なり。人情の流く

にハさらにかゝる事あるべからず。昔より風雅に倫
傳ふ人者ほまれ多し。宗祇ハ家に傳ふ。宗祇が連歌ハ
為に是が筆(?)になりて。されども其心ざしにあらず
継るべき門葉あまたの中に。去来ぶる事一角甲ならんや。
我乃根深き耳の上哉をし。ふ神かく。微細の論を
ことさら神だ。二千余年中(マコト)を流れけれ。中を滌去れ。
流の名とまる。風雅の正道にゆかし。蕉門桃李花
乃開る所日数もくらぞ。其角を他によらふべし。去来ハ理
にまさる。涼菟ハふるきの名を我にも傳ふ。露川ハ
俳諧の教にまさる所。史邦木因ハ風雅のつよさに
傳ふ。千那李由ハ風俗(フゾク)の情をもつるに傳ふ。嵐雪ハ

横斜乃月にまさりまさる也。此外も松竹乃閑窓にすさまじく
杜甫も横(ヨコ)よたふなし。惟我ハ言ることはたゞ杜の當白ハ家
梅の歌詩に傳ふ。評士ハ其文集彩文に傳ふ。さし
芭蕉流に傳ふることもおほし。皆貞流を守るにも人も
あるなれ。嘗て詞書に傳ふ。桜も紅葉にまさる所へ
古人にまさるべしも何ぞべ。我こゝに此の傳へ言ひあなり

愛梅説

全篇説梅而無梅字。終句以二梅字結之

万子

〇屈原(クツゲン)楚辞(ソジ)にもらしき。蘭は宰相に擬(ナゾラ)へ。雪の對
乃おろそかなり。西湖ひとりをかしく、孤山のたそかれ

か。蹄纓(エイ)襟(カウ)紳(シン)をさらはせて。此跡の名目ハ此やうにさし

おきる折からけ順乃句ハ時よこゝろめし。谷の旅(しおう)らして

うふ弁慶を。行乃尾花紫ふがちなるふ。袖笠をかたこちび。

十月江南の天氣醉客するに稱て。酒家乃材をわけ(イヅ)

老の気ハ筆まかする。鉢後の雪乃中よ。名数寄(ズキ)乃様(タミキ)

よ白ハとゞし。遍照が折髪(ハジ)。唐后の寵(トキ)。数珠十露(ツロ)

盤(ジ)乃粒(ツブ)。蓋(ドギ)。深尾の汁。こも塗かきが。風流風情の

まげり乃端(ハシ)なるべし。彼説よいへるハ。牡丹を花の富貴

なる物なれバ。菊をもの隠逸なる物なりと。是らの

うちふかれば。も愛する人よあれども。蓮をもれ君子

なる物なりと。是よりハを理屈よなり袖ゆきて。頭ハ甚理屈か

とぞいへる。梅ハ花乃風雅をねむらむる物也。頭ハ吾風雅を

ねむらを物を乱しまる物なれ。

艸字藤ノ説

五老井 四絶之一區

程己

○吾郷ハ宿する藤をもて大和路也。雲とならてハ。眺望乃

かこちよあらぬ袖を手折て。簪をかざらハ大津絵の

風流なるべし。高松よ倚掩(イエン)して。海岸乃ゆめしすり

ひらめく梅乃侍よ来る袖ハ懸(イカヽ)て。斧をとらなまづひも

なし。藤の性酒をこのむ。此を常よ鉢をあしむり

何の風ハあれて。かく紅のあしとハなりよぞ。あれまいふ。

草の花も花の中の花となるべし。情草にも袖は
色にむすぶ袂を餅の月もちをあつけし。六尺さへおを
留りるよし。宮守もかも足してぞうらやまれける。
折羅(カキ)たり帽乃かざしや花乃む

草苅ノ説

露川

○私の集ふきさハ二百日なれバ京しきあはみづうぞそも穀のまでに
しきさいわひはなきハ一ぐまい着ておりしかるまで。一る豊くく、
子乃ふくみ袖は穀もなく兄弟もなくげにこもかく。
ふつてはいかゞらん。さて波や草津乃松もあのありけ
ものた笠に風情ハ深く袖とし鮑乃いくかよたなれに

たるべし。此草苅ハ笛の名人ざさて牛にも乗せて
おさな袖。其ハおうけ乃ぺんでもいと涼しく。百合風車
苅ふく。緒纏(ギズ)のおゝく呼もあるべし。秋ハむら雨の
さもあらんぞ。花すきハそれ。花ひつまし幸なりて。見あらし暁
ともおうし。秋篠をかゝる宿しきあわせて。坂ハ日影さす
所なるべし。

草苅乃ふくしとほれ野菊かな

山芋ノ説

吾仲

○芋は穀種なれど。山中に生ずるを山芋と呼し。自
然生と称して山菜に用ゆ。細な種てまるめたものとなるを。

はく称し得て。其功もすくれたれど。其味も次也。秦釐に
ある王莚といひ。鄭越には土藷と号す。杜詩嚢中の法を
こゝろみれば。陳苗氏が八珍延の賤を作る。潼山の薯蕷は二千
日旅るまじき也を変ぜば。家々こそ行くの筆は味を引
ず藕乃ごとし。四時に葉を生じ。秋根に子を結ぶ。
ぬるごとこよ少く能て庭禅の畳に入る能。いもずことてふ程
とみえく。嘉閑に頒る。そも秋の麻酒には潘岳の
年をすみ込。和月の青飯には古宿乃とて来た
つるやむ。世に清茶ともてはやさる能とし。家僧の為まれ
がまへしりう涙。人参よく人を活し。よく人を殺す類
なる能はとても機櫚もなき徒を極まぜる。其も勞ひをなど

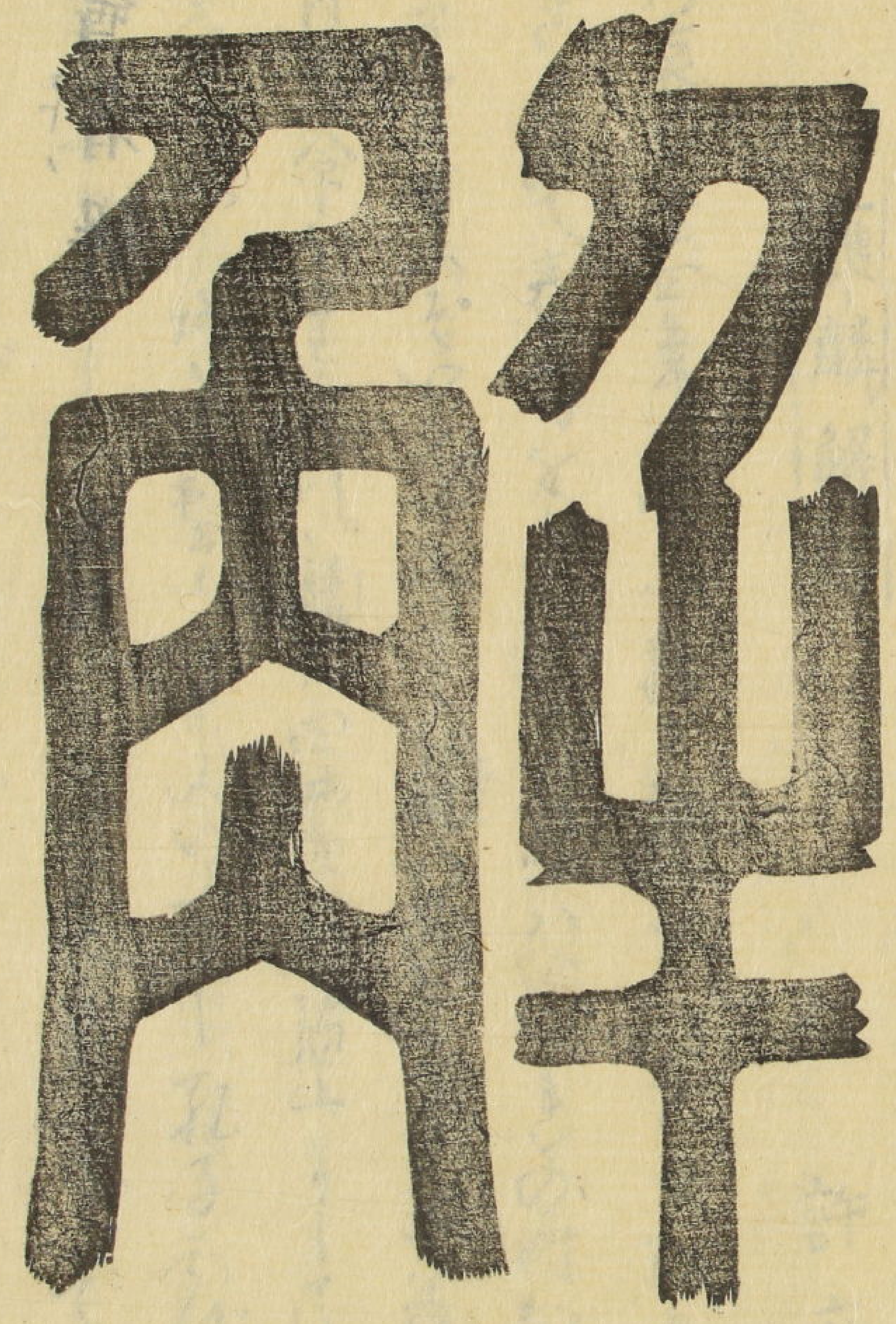
さましかるしてておかしき能は

嘲霄月惑説

毛純

姫乃素のあるは能をあけぬ人は。入麹をこのみ。甚富花を
まさる人は。唐様の書をすく。風雅のうれへは。しもなき
遠ひなれば。かの人生は行を見れば。睡蛍にかきこもれり。麻
借すを楽乃元上とする。麻酒さわ。蕎麦留なく。ひとゝ
とれ秋から是迄とも。夜の晩る事かきもなく。虚薯蕷の
梅紫寿月も化ある。太雪を領じ治めむとおもへば。言下に
治つも又ら合持の流人となりては。蒲の奥よりここ
半藪頭陀とに名を変じて。松嶋象潟に身をまかせ

さ袖どし綿にせる色よんを離りし。献立紙にすゞめ書体
心地せらし袖でやがて其画ぬ書俵し、夏中の発ある
く。首服をぬ抱しなどさ袖。大臾に亀谷をこえけし。田楽
の燒るを待りて。隠人の釈伽にあらけて。業風聴に額を
懸をかゝる人をぬしいふ事を志うる短き戯書画一六歳
風の撰様しなばへ。花鳥風月は其本に出しとぞ有志係。首
宰部が画服も。秋ふくあてぞ舞つりにけし。古人の號
を名付とふる。諜にゆへあり。八旬七十。今は皆いきれ。翁とし
あ十七死ありとも。百年の無量にはあとけへし。是あるく
嵩鴻は。歳るまではうまる錦とし。瓊れる情鳥は。細まかし是之言
やがて。なすろうりしを書とぞとしおほりし書れ。



獲麟解（クワクリンノカイノカイ） 許六

長雪隱解（チヤウセツヰンノカイ） 許六

藪醫者解（ヤブイシヤノカイ） 汶村

五老井 許六 選

○解類

獲麟解 許六

○魯乃哀公十四年。西に狩して麟を獲られ。孔子大きに
なげき給ひて。春秋を筆とゞむ。夫麟ハいつもの時におゐて孔子
そつん安くしのふぞひとやぶりし。鼠ハ愚にして火鼠の名
をさけて。命を全うし。麟ハ四霊乃随一にして。狩ある
事を志らざる。終に人にかざらるゝも又やぶりし。孔子の涙かゝる
聖人にあらずかは。されバ牛馬の生れそこなひなるとてやあらん
まじとは。孔も又やぶりし。麟ハ世道おこなはれざる故也
也。道なく麟ハ世のさかりにあらで。聖人の上にかなふまじからや乎

又いぶかし。麟にほろびきは。聖人も世にうせしに倒れても
あるや。何とて聖人うせの上に倒あれとも。道ハまさりき
麻をも見よとてもなきくよゐしかぞ。儒道さかふしと
おりよそれハ。麒麟を出す一つにあらしうに聖人をあがむ
べきくり異んれるきバ獣に誠き。樹の歯がきバ子に別くて
石とて一業のそれハぬらく此しめて。着おもく角ま
獣ももえた鈍き樹手段名れきをひおつ子を生ふまでも
なし。さ統バ仁義乃古にもおいぬ名めしも余かぬべし
麟をすりぬ雖ハ人もあわや。又聖人をぬぬ麟鳳もあわ
やびりし二句を紀帝にも獲孔子おゑ。紫きこ聖なし。
和歌も神代のおすでよ。当時石ふ枝をいろしさぬ雖

如なるに麟鳳ハおそる取ゆ治もなし。大かたに石ながら
鶏ハ時を報ぎ麟も生く人もおそき沢。鳳峰て旅宮
乃息を破る熊なし。おぬ方の聖人バよく自わからわ
むべし。又ね康古乃為も福じと。徹当紀が安やまわる
そりしかぬ其をよこそろしや。世間聖人と云う沢じして。
麟鳳との間とつきて末乃孔丈の不同神ハかの一言は
あやまわりて聖人なりておのれなるべし。今此麟と解
しておそろしおそれ蒙する春秋のよき儒家にもお公せ居
句乃叙句と見てたしぬらバ。何乃麒麟なりし何にか
乃あらむや。

長雪隠解

許六

〇予藝の達人ハ。獨寝に上座を許されて。名字持さる人也。神農の身にをする也。果報早喰。子書画ハ。田舎子の一癖とかや。ども。此藝を好む人ハ。風流雅の人にあらず。名をいひて藝はつきぬとかとも。一藝一流あれバ。万流一藝にかゝへずさ呼んでさへ候バ。閑寂乃名目の分別上手に定めや。此としては隠語を致し。森業兎がきざを精かぞへてそらは。信長公も藝者と云へばこそか。候介連歌乃名句も此和わ壽帯し。太閤十八度も此室に入て工夫を極めぬ。誠くくと一生世乃あり様を見して。やむや風流乃秀

薦(こも)乃編笠(がさ)をかぶれ相応まで人にハ深く見へずといふとなり紙布に隠家(カクレガ)ありといへるも。情にも此家乃手なれが。世務不用乃人々も自分も静かしき閑閑まる時ハ。市中郷(ざい)に解(トキ)て公役を許され。かゝる閑居に入て縁を遠ざけ寂寞(セキバク)を楽まんと元(つまり)をかぞへ候。

何おもふ世雪隠乃春の園

藪醫者ノ解

汶村

〇世に藪(ヤブ)醫者といふハ。本(モト)名醫乃称なりしを。今は下手(ヘタ)のうへにハあらざ。いつもの御附に。何ぐしの名醫。但別巻大(ヤブ)と呼子不に隠まで。源療をほどこして。死を記

生まに田(カヘ)ることおほくれぬしも。されバ舌風をもちひ
其業を習ふ事は津々浦々までひろがりて世にはびこれ
且くび。病家も信をおかし。薬力も飛がごとく効を求むる物
換易(カハリ)穏(オン)移りて今ハ長物も古着となりし甚だ
益となれり。当時の藪医をとんでもない門には座頭(ゴコ)の
駕籠(カゴ)にのり物をはずし。竹杖子(ガウシ)に雲霧薬乃看板をとりけし。
冬中の拝みも半(ナカバ)ハ兀(ゲ)たれど、まださらの薬これを転じて。
薬店(ヤクテン)にて見らしせ。物申(モノモウ)ハ暖簾(レン)の内に答へて女房の顔
をつくり。町役にハ寮舎(ラウシヤ)を療じ。薬代にわたしても河原者
に乃まま後日(ゴシツ)膝ハ牛乃膝(ヒザ)を見る日。鶴亀(グワ)も鶴(ツル)の声
みをさげてと薬のくまも外耳にかまきて胃(ソノ)の気よりもえ気

裏(ウラ)へまで果ては何がし村乃庄屋の脇(ワキ)をまわり。一家(ガ)仙遷
の名をとてる紙を押ば所説(ジセ)もいまだ顔にしるきに
己が能を思ひながら。家に遁ぬく紙に今なほ
河御侍(カヤ)ちかめん乃、今尾の井もおかしけり。
繁(ト)衣(エ)に蒙(モク)(ラン)のさとの払子(ホツス)もん件(モト)多紙ど
佛法には薬毒の気遣(キヅカヒ)なれバ。されど大事なるべし
まさじ藪医者乃半ぶりしも文ある所の子も尊
ならむてうはさした紙。

記

落柿舎記 去来
幻住菴記 芭蕉
十八楼記 芭蕉
五老井記 許六
九華亭記 汶村
琵琶亭記 許六
風臺水臺記 許六
附 紀行
鹿嶋紀行 芭蕉
南行紀 李由 許六

風俗文選巻之五

五老井 許六選

記類

落柿舎記

去来

○嵯峨にひとつの幽る家侍るぞそのほとりに柿の木四十本
あり。五とせ六とせ経ぬれど。このみも持来らず。代がゆる
わざもきかねば。もし雨風に落されなば。王祥が志にも
はぢよ。若鳥にとられなば。天乃帝のめぐみにもそむかむと
おもひむし。屋敷に侍人を置ハいかにこの志わするゝ。
たゞし八月乃末かしこにいでおはしまし。こゝやこゝら
商人の来りて。立木にかい取むとて。一貫文さしおき

侘びかへりねバやハ程そこにとゞまりけるにおかしくと
塗抹し借居ひしくとをはつかして数人あひから落
もやすれ渋きバ高人の入寂来れ指ほぐしと赤添
め、あむすふ髪乃ひまわ、白髪生るまでも要業とし
ゆくもとかくそのむかし落ぬる柿をとらんにさのみ其価ひへし
これをちびてもひやし翁いと役ある者ハ冷ハ止ねたし寄
乃かへるまゝになと持乃許へ消息送るとてこ所から落柿
舎の去来と書たるに発句かく

柿ぬしや木末ハちかきあらし山

幻住庵記

芭蕉翁

石山乃奥岩間のうしろに山あり国分山と云そのかミ国分寺乃名を伝ふなるべし麓に細き流を渡りて翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせ給ふ神体ハ弥陀乃尊像とかや唯一の家にハ甚忌なる事を両部光をやハらげ利益の塵を同じうし給ふも又貴し日比ハ人乃詣ざりけれバいとゞ神さび物しづかなる傍に住捨し草の戸ありよもぎ根笹軒をかこみ屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり幻住庵と云あるじ

乃僧侶かしハ勇士菅沼氏曲翠子の伯父よなん侍由
を。今ハ八年そのかむかしよなりて此よ訪侍る人の
名をのミ話きわ。亭ハ又市中をさる事十丁ほどの
ほとりみ十町やうのあり。月ハ叢生乃みの縁あれ。
橘(くわぎり)れ家を離れて奥羽象潟の景をも目よ画をこそ
しのぶるなにある世ミくるし。北海乃荒磯よ立べき
岩ほつこて。響(とゞろき)激れの波よたゞよひ鳴の浮巣乃
あへ移さでもあるべき。菅沼の流るあわりと
新緑あかる光。垣よ続きへ寄して卯月末
さぐ光いとなわ。秋よ入し山乃やゞそむじしとさへおもひ
すまなさんかなる乃名跡もをきろぞ。つゝし咲がな。

山麓よかく川ろく附る志たしくるこるかしと寂しき
乃僧さへある紙ありてまかはくもとも、とハしげかぐく
添ま興じて魂(たましひ)是楚(こつ)東南まあそびて身ハ瀟湘洞
庭ま立。山氣(やまかつ)来伸ままバ、舟家を紀伊とす
隔り南薫(なんくん)岸よりおろし北風海を浸(ひた)して涼
日枝(ひえ)の山。比良の高根より。辛崎の松も霞こめて。
城あり。橋ハ雪。鉢あかれ笠どかまかよ
来雁(きがん)の声。堅田の小田の乎み田とる言。蛍よ飛う交ふ鷺
政ま。水鶏(くいな)の音ともえしき。蘇京起として高ろぎと
以ぞすれし。中にも三上山ハ士峯の俤よかよひて武
蔵野ふるまずさらもおもひいでゝ。田上(たなかみ)山ま古

人をかぞふ。さゝほが嶽。千丈が峯。袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて。網代守るにぞとよみけむ萬葉集乃姿なりけり。猶眺望くまなからむと。後の峯にはひのぼり。松乃棚作り。藁乃円座を敷て。猿の腰掛と名づく。彼海棠に巣をいとなみ。主簿峯に菴を結べる王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となりて。孱顔に足をなげ出し。空山に虱を捫て座ス。たまたま心まめなる時は。谷の清水を汲て自炊ぐ。とくとくの雫を侘て。一炉乃備へいとかろし。はた昔住けむ人の殊に心高く住なし侍りて。たくみ置る物ずきもなし。持仏一間を隔て。夜の物おさむべき所などいさゝかしつらへり。

さるを筑紫高良山の僧正は。加茂の甲斐何がしが厳子にて。此たび洛にのぼりいまそかりけるをある人をして額を乞。いとやすやすと筆を染て。幻住菴乃三字を送らる。頓て草菴の記念となしぬ。すべて山居といひ旅ねといひ。さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠。越の菅蓑ばかり。枕の上の柱に懸たり。昼はまれまれとぶらふ人々に心を動し。あるは宮守の翁。里のおのこ共入来りて。いのしゝの稲くひあらし。兎の豆畑にかよふなど。我聞しらぬ農談。日既に山の端にかゝれば。夜座静に月を待ては影を伴ひ。燈を

取ては罔両(モウレウ)に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦(ウン)で、世をいとひし人に似たり。倩年月の移こし拙き身の科(トガ)をおもふに、ある時は仕官懸命(ケンメイ)の地をうらやみ、一たびは仏籬(リ)祖室(ソシツ)の扉(トボソ)に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を労(ロウ)じて、しばらく生涯の計(ハカリゴト)とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。楽天は五臓の神をやぶり、老杜は痩(ヤセ)たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻(マボロシ)の栖(スミカ)ならずやと、おもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木も有夏木立

十八樓記

芭蕉翁

○みのの国ながら川にのぞんで水楼あり。あるじを賀島(カシマ)氏といふ。稲葉山後(ウシロ)に高く、乱山西にかさなりて、ちかゝらず遠からず。田中の寺は杉の一むらにかくれて、岸にそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。曝布(サラシヌノ)所々に引はへて、右に渡し船うかぶ。里人の行かひしげく、漁村軒をならべて網をひき釣をたるゝ、おのがさまざまも、たゞ此楼をもてなすに似たり。暮がたき夏の日もわするゝ。入日の影も月にかはりて、波にむすぶかゞり火の影もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するなど、誠に

めざましうおもふあたりもなかりし。かの瀟湘乃八乃ながめ
西湖乃十の境も、涼風一味乃うちにおもひこめたり。
もし此楼に名をいふとならバ、十八楼とハいはま
ほしきなりとも。

此あたり目に見ゆるものは皆涼し

五老井ノ記

許六

○霊泉あり。水乃色ゆゝしう、纔に尺あまりのわき出し。一千
尺乃盆池にわだかまる。瀞く溜りをなす。五老井とし
名ばかり別墅をひらきて五老亭を結ぶ。主人姓ハ森、名ハ
許六といふ。ゆゑに五老井先生とし、五老ハ亭が別号也

驛ヶ原不知哉川をわたりて、彦根の山南に近し。旬乃
休暇をうかゞひ、朝日の関を鎖むる事なし。蓬蓽に閑を
此の雅陽を坂西に顕しめ、人倫の交りふかし。霊泉を去
事汲く、風韻乃匂ひを、簾の中にとゞめむとおもひし。其水
乃清き事ハ、恵山乃泉脈を通じ、其きる事ハ蕭刑の金
泉にひとし。茎出る花乃翁、白蔵の茶をさけて、あん
四時の茶瀞を事とする事ハ、更ふかくこゝぞ、一とせの月ふたたびく
泉を掬する事ハ、蔓を引とゞむ。霍山鳴ヶ井、盤乃細流。
為もの八乃柳の陰に、今此水に傍ぞんぬ。其漢の要害
大にして、神仏をうらむとなれ、すべしぬ。且甕の井ーを擂
乃あふをとゞめ、きてもわ。此民の程やらなりしむ。ゆゑ、

山あるをさくる雲山墨とし以て嘴によらそで。富士に對して眺むる
きハまりなし。瀬水の鳴く。江南江水乃山の音すずかね。万物
保ちの心なる。然らん三四乃ミる折々の胖をさらへ。西寺乃つれにあり
かくあれ。雪ハ太子の行あり。大臣乃名どころととかれ
杖を曳てハ藜を旦夕墨に登る。蕨ハ靈を多く作て覧を窮
ハ茗粥を煎く。柿庵ハ縁に遊ぶ三枚をまうけて藤を穿
め。賓主二人一庵に会ぐらし。茶碗ハ托が筆墨のかずに
なし。月に衣貯をミへ。禪路の詩に墨の跡を含まん。林
をかれしむ。庵に芋をあてゝ。樹に木鋏を入ず。窓おの堂
をのけがらかにあら。ハ畑を宥てハ。狗乃凡情をもわすれ
乃茄子をを植ゐら共ども。山樵乃為にせしてミ藤さる。呼。滑稽

士。文画に僻する事二十余年。予瞻芝の掃を呼よし。揚
子。梅道人が骨髄を網て。画禅乃たをかしむ乃根。自
然に一條の風雅を兼むる。徒世上の多が字に根を繋で。々
が心頭乃をとの。ひとつてはし。風雅ハ見聞をあしそふ。
画盃ハ郷土乃たかきものハ山重となるものうち風雅の
為に。文画をさけしをもつて。以てとれをなすもの。亦た其に意を
同じうして。よく言語を述ろもの。絶日樹下の
個々に袂をわて字に誉なるをのなし。四隣乃ものまつ記
同乃蝶々のそ。然て達更に腹鼓を鼓しむ。蓋元の流
に脚を洗て。傍る。于時元禄五年壬申二月。花鳥
寓於林下瀧湧毫

小鮒をさへ釣らしめ人まハ御免れ

九老亭記

汶村

〇亭あらし。九老を名ばけし。九華ハ何ぞや。抑九老安妃ハ神仙の名なりけん。山に九老あり。丹に九老はありし。家に名ある八重條の周るなり。魏の武帝ハ臺に名づけ窟の傳氏ハ家に名づけし。観あり。殿あり。帳ハかしこに府あれ。菊に九老乃名ありて茶にも又此花を称あれ上清宮(?)人ハ日月を呼び太宗九華殿とし、ここに居(?)とて釜井乃九老をさそくふ。建勲ハ九老先生と号し前鶴ハ九老山人と称す。我が指の亭。九々陽の格数といふ理あり

かぞへても菊ハ杜甫乃ひとみもあらねど。芳をとやしなふ乃天地なりしくなりて暖(アタタカ)に四要(?)常に桜のかぐはしき翫声に鬱(ウツ)ぶ。青楓風すゞしく時にしぐれあやしきにかぎり鶏(ツ)井(?)にて敲く。萩女郎花も細うして菊に黄(キ)に柝(ハツ)さびしきなりけり。沈居(?)保頃(?)遠くとぶべ。手真(?)に亀合に花ちりく時にあり。亭外乃風物もくしかりそも亭井(?)のある数。又いくらぞや。扇風傘蝶翼(?)畳(タタミ)る一色。鶏一羽。亭あり。人さこらへき誰ぞ。近隣嘛(?)トに於て汶村之としり記をといふ。

鼓琴亭記(?)

琵琶亭記

許六

○むかし嘉祥乃比。貞敏といふ人。二面の琵琶を唐土より
伝へ来。于今代々に伝ておさまれる。楽器おほしといへども
あるが中に大乃なるはや乃絃。又ハ田舎ものまでにおもしろき
乃ミおほし。まてに名器一面ありて。絃まなくてあそぶ人なし。
湖乃江汲も。撥絃ありてとじきがて関乃蝉丸も。膝
せまきの袖ハをしけなし。柱にハ四乃緒しくをそへて。落
べきまづらいもなく。何乃条が枝乃そくいおもいさづるなる
べし。撥面にハかく湖の松を思ひ起。覆手にハ堅田乃なる
猪をを撲ちへわ。二つ月をのせし。日入方のたそ気を添

雨乃細きいとを鳴らと。絃手に縁ぢあるを花さそふ山沈に
あおよも袖をおしみ。鶯鳴浪乃夕を袖にハ秋乃おもひ
とかなしむ。あまてや弾じ。夢にてハおきなど倭時を浮びた猶
川に足をおろけ。眠る時をこえ伊吹に枕をとるもとに衛
乃あるじハ謡を松原氏とびりかへるに。此袖を琵琶亭
と名けふ。むかし伯牙が名をさんべも。鍾子期が耳なくて甚
益なし。此袖をきく人ゝ誰ぞ。花井の許由ハ力を
合せにまぬかせて記を閑ど完み蛾乃耳登。大の楽つきる
事を。ここに楽とよみるべし。

風葉水葉記

許六

西梅庵の前に風葉水葉を築く。風ハ涼をとる時ハ
月を寄まるゝもんなるべし。其の風あまりつよく吹ば
香しぼりして桜の影を浸し。雄の嵐すさましき時にてハ泥
あ稀て荷葉あおらそうなれば。主人徘徊風よ、激しく
遊べば。所宕李氏破で月をも待。甚く筆蹤をこぼす
ざればかりして名利の峡しきもなし。前に風狂の趣世。
此庵にあそび川く。風水の二つを浄ふる事ハ此等にハ夢中ぞ餘
酒にあれば上て付て風葉によるゝ稀ていかとうしやさら下ゟ
笥ハ水葉に服をぬらしてく風を戸せむとて此
まるよ。帆半ハ双角の浄に筆しく深更小隊の戦ハ似
まわざ也ど酒のこゝハ右のおもむき。只よろめ紀てゆる事も跣
く餘好さて摘ことん裙。吟をなもしてヒは鶉に懶し。続に
相引よりて退きとをヘ人ハ楨公乃殺とかハく社をこまぺ下
人ハ猴様と化して後を極て楽しむそへ。

○紀行類

五老井　許六撰

鹿嶋紀行

芭蕉

洛の貞室。須广の浦の月見に行て。松かげや月は三五夜中納言といひけむ。狂夫のむかしもなつかしきまゝに。此秋鹿嶋の山の月見んと。おもひ立事あれば。ともなふ人ふたり。ひとりは浪客の士。ひとりは水雲の僧。僧はからすのごとくなる墨の衣に三衣の袋をえりにうちかけ。出山の尊像を厨子にあがめ入て。背中にせおふ。拄杖ひきならして。無門の関もさはるものなく。あめつちに独歩して出ぬ。今ひとりは僧にもあらず。

俗にもあらざる嵐乃月に。名をかりぬめり。筆なりに海
にも浦つたぬ座て門にわ、松に露て。紀逸といふ人あり
一蓑庵。松を友にして。馬ものらず。細脛乃ちからを尽し
さむしろ徒歩にわけ行。甲斐か嶺にある人の許にとゞまる。
椿手又そばくまる笠を。ぬぎてゆくてゆく。
やまさとは夏をすぐれば。かまくらの家といひて。かりの宿に
あそび秦甸乃一千里とかや。目もおよぶかぎりながめ
はてしなむ。こゝろよく。二葉なりびきて。かの唐土の
双剣乃峯あわとむかへし。八方山乃一隅なり。霧を
やまさと沢先とりて北乃つてにかれとは。我門人嵐雪が句
なりしをすゞろ思ひて。日本武蔵野の云葉をはらくなり。

連句まじへ人乃ゆるしをうけ名をつけし。おのれ和合のたのしみ
あそへしもなしたる句なくなるべしとぞ。祥にゐしたへよ山の姿
なりけらし。旅して浦を枕にあそびしんやうれ。為仲
が長柄に折入りて。鉋の木屑に持ちきたるも。風流のく
かしぞき一ちからぞとなへし。かるかや。尾花こゝに相合て
小男鹿乃つまよ恋ふ声す。ひとあはれ旅なれ。野辺の駒。西に
ひかさむ旅あはく。又あはれ旅也。日すれに草をかくる狩に。
利根川乃かはらも梅さといふ所にはしく。此川にて鮭の
網代といふことをもちて。武江の市にひさく共あれ。
宵乃月じしその漁家に入て。やまといふ。夜ふけ宿腥し
月ら雨なく晴てまるかくに。我船さしくだして。鹿島に

いまも浮世は西方にありと聞えんとおもへくもあらねど。
禁裏に猶おもふ心の和尚。いまハ世をのがれては山本に
おはしまる。としいふをきくばかり入て、棒しぬるところに参
入をして、浄菊を發ましむ。閑しき事むかしの身すて
清浄の心を得るにかなはず、晩乃そいさしの庵ぬる世
和尚おもひありしかど、世ハ人に白露ならぬ月の光、西の
空をあつめ名なる折節しきの色、むらさきの雲にみちて、いへ
ふりも楽もなしとかく、と月又は来まさるが、我もまた
こうかねぬ身にこの衣とらなれど、かの何がし乃女すら、閑居を
許し、兎角世をまてかへつとのうづるひしも、おなじ末の世をまもれ
荊棘乃人なるべし。

つれづれや精進の紅をおちなる　翁

露ちる奈良くの扉おもひくる月見かな　童子

南行紀

李由

許六

○鳥ハ遠く去る神なりけり。譬ば白かうん殿のまたまた益ニ
あるにおゐても名を忘れて惜しむ。義ハあまりに今も移くる。
合羽でも仏法の術を入たれば、字を識る一芸にて天晴備へる人
乃出立も、お本まゐれば、二月晦日といふ日に、帆を十石の宿を離
れ、名古屋の日の一つまはらめば、かのく田の柳、つれづれと説く。
まさにの旅子乃ゆかしく、操乃心にハなけれども、さらにそれは、遠

路遠しとばのきをかゝげんし。箱よりけさらる頭陀袋。
男さて見れば果し乃布し山乃山中に道やませぬやと
見まいば。人を神る聖なりそれ。男是より角文字やいせ
乃要何の。訪や花やと手つ神や。がそ出の池にはくゝよ
おる者小風呂に河辺に河をう川し聖名神の段よ
至殺ハあら湯と清氣に脳ハ湯治のおはなを定ぬ。
朝臣くの子と筧に紀さむ。それも湯治よつまて入ぬを
べしとて。書地も湯治と男に浚しぬ。
〽聖ききば深生許り湯治に男ぬらしじと起て行べき所へ
くし湯例の一藁去にと勤まれば。聖さし流まそ待藥
まわ。泰氣に花梗にハ香も要ひさつるぞかくさ。並木に林

法まよいたり給ハ、ふしきなりと。そゞ近江の笠乃内に。をのしみてゆる
鉢療山神むしとて。聖がゝる笠也。男ちる。
〽天井(テンジヤウ)ま首ハはらくし山さくら　聖
〽伊勢ハ前馬士(マゴ)の鉢療や花男の　男
〽ト星坂。山あひくるゑ雲の中に坂治乃蛇も猶なく
ちりくるもやらね。
〽鶯も竹の林や鉢あし　聖
〽是峯の関の地蔵まそこんさるなれ。茶店をまこ
ずみて。焦がれる膝をうけさらね。
〽田乃みやあふのくにまなくぞら雁　男
たち袖に立るは。まぼにがれば。宿乃葉陰もおぼつかなし

二日。暫やすらく起きて。旅中の男を起して。嬉野をいづる頃
胴の気に。舎は伊豆鉛がかひらぬをまるに。且那を櫛乃臺
四ッをさげしきにつきたるへきわつかる間はぶせく摘さき
わやがてもかくらし杖笠もつるきを並へし。縫乃宿しき
つ絶るされハ中日か役を告らぬばき拙きて嫌下によりやの
志めつきを笠ハ上壇より其ながらぱし宿銭おまちわ。一お指れ
宿並ハ志川よりわかへつとも。たかたの鶴乃声をきし能なか中
をむめけて。火縄の大気たちしとつえしらんしるにも絶なり
毎に。還庭均が早行もゆあ知ぬまハ。此宿を湯なよ
して。雲津川乃假橋を渡る。かくて。やどし宗峯楢の
国にうらんてわ。松坂乃矢川をいでて。人乃面白く見ゆるわ。

そち京さ紀府よとへ。今ハ絵てやちくのかまたわきとてよし
流人が纔妻。江口。神崎をむかし漂ひともおもしねらぬき
のよ縁洲ら。こよ縁矢河てなもて。人のかて。家々の軍もねまで
檣葉の船ハ。むれしを帽のむらがりて。京殿余離婦
漂て。流よ風よ動く。今ハそれにたえ着るなし。

松坂や離け宿に入くし江戸しさんら　男

出替の霊むら濃く嘲野に　耍

吉川乃浴てと継く。代垢離の子たらて。櫻乃そよく。
浅判の袂らて。解て見らわ。

鰹漁乃操よ春らぬ柳しるれ　耍

山玉よ今く。何りしたまりれしふはく。日之々れバ。余京式

みなそむるね。
柳神おに備へ来し袖ば、よろ川の名にハ忽もりまさく
ころもきたる一すじに涙ハおとし行かね。

奉納二句

「青海苔も初かんの塵乃ひと川　男

「松桜川を隔てゝ墨乃袖　女

夫乃居ところに入ましバ、行ばかりやりし。豊国乃ひとりしらひ
吾が袖をぬらすわかれなし

「究竟も天狗ハおそろし雑子参　女

近営に詣て、御社ちかく杉乃むら立みへ、荒羅川に
きまくおの袖、御寮おハあんしんして白石のうえに畏

てありけるが、はやばされんしもまどふあわてゝ又上も沢
巌乃松風身にしみわたる頃。小袖の袂にさわりぬるも
いましきん枕せし袖。あらはにかきとぬれちがひを
さしそふるなわ。又奉納。

「百八乃なみの浮藻の松　女

「今そ志る居間の花も流さるゝ　男

つきせぬ御名残も言ひ尽くし及つゞけすそ小袖膝にかく
おさめ。二見の浦もゆかしき袖ども、行きかよひそゞろに
おもひつゝまゐりて、御乃大宮の御前に詣でてのちね

序

曠野集序　芭蕉

宴柳後園序　支考

四絶文章序　李由

画楼繪合序　許六

銀河序　芭蕉

猿蓑序　其角

近江八景序　千那

要文集序　許六

麻生後序　許六

番椒序　野坡

○序類

曠野集序　芭蕉

一尾陽蓬左。橿木堂主人荷兮子。集を編て名をあら野といふ。何故にこの名あることを志らず。予はるかにおもひやるに。ひとゝせ此郷に旅寝せしおりおりの云捨あつめて。冬の日といふ。その日かげ相續て。春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着弥生乃空のけしき。柳桜の錦をあらそひ。蝶鳥のをのがさまざまなる風情につきて。いさゝか實をそこなふものもあればにや。糸遊乃いとによれるもん乃ひかりあるかたに心をよせて。姫ゆり乃なにゝもつかず。

古人作乃おほ方にもちれまで、風景乃きハまりなん道芝乃
みちしるべきひとぞ、此野の原の野守とぞ申侍るべくし。

元禄二年 弥生 青

猿蓑序

其角

誹諧の集つくる事、古今にわたりて、此道のおもて起こるべき時なれや。幻術の第一として、其句に魂の入ざれバ、夢に夢みるに似たるべし。久しく世にとゞまり、長く人にうつりて、不変の変をしらしむ。五徳ハいふに及ばず、心をこらすべきたしなみなり。彼西行上人の骨にて人を作りたてゝ、声ハわれたる笛を吹やうになむ侍ると申されけるとかや。人にハ成て侍れども、五の声のわかれざるハ反魂乃法のおろそかに侍るにや。さればたましゐの入たらば、アイウエヲよくひゞきて、いかならん吟声も出ぬべし。只誹諧に魂の入たらむにこそとて、我翁行脚のころ伊賀越しける山中にて、猿に小蓑をきせて、誹諧の神を入たまひければ、たちまち断腸のおもひを叫びけむ。あたに懼るべき幻術なり。これを元として此集をつくりたて、猿みのとは名付申されける。是が序もその心を取て魂を合せて、去来凡兆のほしげなるにまかせて書。

題柳川梅園序

支考

世にあそぶ人あつて、詩は雅錦律にそのしふ時は楽つきて、梅をしたしむものなし。山林樹下にあそぶとおもへば心にこゝろざす御代は世にうとからむとも、わきまへねばしらぬ川のさかりはみよしのさくらをおもはずんば天の遊びあらんとぞむかしよりいつはれる。さればこそ柳川の梅の何がし、二三の友垣をあつめて、あそぶことおもしろく、額に六閑の一字を題して、花のなかに遊ぶ時を梅にならしやかましき時にさりさはに立て、それ風の心にうつりけるたのしみの戯れはやゝおもしろくして見るも情を此中にあそびて、人は酒のすゝむと仮しけるにこそ。ねがはくは此風情をいふ人あらば、罰は金谷の酒にかへ、のがるゝ俳諧に棄し、入来る時はなほおもしろくおもひて、心ざし給へともかくもはせしとぞあらはし給ふ。

近江八景序

千那

近江八景は、瀟湘の絶景をあつむ。瀟湘は漢国にありて二妃石山にはるかなる。西湖は章詩をもて浪し、勢田は夕陽を合せ、瀟湘の八景によそへて、八カ所をえらびて来たる比良の暮雪の月に興じて、近衛の政家公、石山寺にあそびつる時、そのかみこの八景を詠じて、すべて石山の八景、浮寺詠山の十境の題をかんといふなりけり。

さまどし此上乃八まで並ぶるを読ちを見んによくしるべし。
八乃絶句ありて不例まとし。総読の八景あるをや。
さ絶ハ近江八景ちてあふを人がよしとて給ちて愚老が
筆をとりて此八景が墨。墨田の瀬戸の秋景をせけしぞ。
自他まで境乃絶を集てすぞる近江八景の一軸となし
二絶を示しめてよ自序まてを書き江州の産葡萄
坊の主人僧千那が筆をもて猶ちる乃東軒よて序。

四絶文章序

李由

四 許氏が玉堂井よ四絶あれ。絶ハ絶句の義なるべし。
一よハ帯字巌。二よハ揚揮豆。三よハ花圃。四よハ
業をもなるへし。或問うあるを。四を須弥の四州によるや。
四。不然。四海四方四よあらもハ。四時四月の四ならずや。曰。
不然。四恩四教の四よまでもハ。四民四姓乃四の数
ようや。曰。不然。四天四瞻乃四を称かんハ。四王四皓の四をとら
やむ。曰。不然。或倡乳として問をやめまし。許子が曰。
分別序ハ或有よあるぞ。夫三絶五絶の増減あるハ
吾子が楽用ハあちぶるお遠すへし。それ一二三四の中
高ちあまる絶バ四絶とハ云むかし。愚なる法師あり。若
才かしく法名の文字よくるしみあへ。ある人をしへていわく
まじ法乃一字をかしらふかうふみしめて。下ハいろはを付て
付くべしと。法師名ほよちけるをやくて法いろ法呂と。

賤しき名づきて、むかし三乃篇にいでゝうち、第六の出家にある
まうで、時にかけりを売者にうわて、諸名をさへといひて法六
と改名して、やうやうきぬ、妻子ふくみ、形しるともよ
は世の業ハ是非なし、世火て来世にまよはぬ時は善悪を
きはまるべしといへども、法師かしら作物て、ふ法名ハ本乃まゝ
いまハあらねど、今六の出家ふ徒ハ是非なしとて、終に法名
なりして終つてぬ、今やが字絶も、かく残さじと、おのく
これを感じて、説・賦・銘・賛乃字文を書して終り
不老志ふとくし、其ハまめ一徒ふ一章をくはへん、おそらく
ふみ絶となりしんみを知らく、やがて此文章乃始に序し
てばいんをのべくば罪をまぬがるゝの。

要文集序

許六

つね須山乃秋ニ置きて小鳥ども、法華経よくと囀かし鶯の
主なき竹藪小鳥ふ本尊のありまさしくとて鳴を百舌の餌わ
くはおの一声のおよばぬわうる鶯声もまづ啼ける鳥の声
かましく鳴き一雀のちからし鳴て、腹させる鍋で
やあわ寺僧ならぬとけ、法も読よむもちゐ、かあくちゃく
よらば物言ひふる親つよまりおり、られぬを親つまゝ
そも同じ事ならぬ鸚鵡ふイヤヂメくし両部しのか
かはゆめやあてきむしりくそ文字を覚ゆるものあらんや
鸚鵡といふ鳥ハ人のいふ事をよく真似するゆゑに流す

でも形躰を守るには。父。母。爺。口。鼻をよくぞ生まれつきぬ。
命はむかしより秋ばかりは縁つきて怪なるをかまへて神と。
甚だしきことしれずや。父母乃遺体を守りてもなくて。
此世を渡るの志似を不絶とし。一生飢や寒にろく
ならざる業をもなし。さらざらしくふしぎと覆ふわ
きる栄にある事なんぞ。尊を小児に神をも染の
言上とおぼしくて筆はまさしく書付たる俳諧文集
とぞ申侍りける。

画楼絵合序

許六

○和翁乃むかしへ絵かく人の中に。犬羅子が家を焼て不動尊
乃好事とふるひ。ある人他の為に説き。漢土の美を入く
画家乃名をあらはす人もあらざれば。当世の風俗にあつ祢
をくれし。布袋。福禄寿の二字をあなどりて。あの鍾馗
乃一列に入事となれば。陟しれば何ず一むかしの人の様を
ねがへ。次に安楽をきかれ。画生乃思ふく人の。楼を造りて
人をも搾ぞ起して思ふれ。営むく思ひ。おのが精神を画せし。
猫を思ひ紀て鼠を絶ともむべなるかな。画楼を造
らしむるは是久し。さまざま流行老成よりまで絵事を
三かは稀也。一とせの中。夏冬の一とせ。花は吾嬬のこかげ
言ふをて思ふくはなし。冬宮との三月を。水凍。節くだかど
きて思ふくはなし。是を一とせの半月乃楽にさそらひ。

於雷西陣(?)寒八ツ日の持仏堂に。又公私のいとまをねんみ(?)
花を座(?)し。水を献じ。香を焼き。吟じて又
思ふ日もくれし。たとへ(?)しき詩の日あれハ。愁ひしも
房をうつし。ひを以(?)て。例の新客入らざりし。あるひ
は吟じ酒飲。炭火よからぬ時、又果もなく。花(?)様(?)がなき字
しるしあり(?)果なく。七年の春。頻りに画像を造り。おのおのき
さ寄(?)まで飾(カザリ)らるるの後の。花草(?)香炉乃しつきを授(タス)
くるに(?)喜ぶ(?)ことあらず。日々像主乃目を見て。今日も啓ぐ(?)
ことなれ。人毎に像をぬひ出(?)。きハ先にて此詞あれば一年きたり
ぬ。三会乃暁を期もとし詠して帰る。次の日来てたのむや
其ほかの罪をまぬかれむ。年かへてはけみても人。一生忘るくまを

去らざる。一生二生まで乃罪をうかまん。家に居て僧(?)をゆく
恥(ハヂ)を悲しまず(?)。まして父(?)ども像人にハくらべし。二三年ゐる尺(?)
五年めぐる年、絵をかいて七年乃月日也。まして成就乃
時至れと志すべし。像成て門下に六人(?)眼を据(サダツ)て。今
物(?)山に花鳥(?)をうつす。各一軸を懐(フトコロ)にして左右に列坐(?)。
高(?)ぞ(?)に勝(?)者を争ふ。此挑(?)ろかく(?)門人ほく取り合ふ。
二種を画像乃絵合とし。像主あると共。許さる。自
序作りて(?)し。又鄭(?)公が標(チヨ)数(?)ありて老画師と
称する(?)の。于時元禄十年(?)冬。十一月日記(?)(ス)。

麻生ノ序

許六

麻生乃名を烏帽子折ともいふなり。好に烏帽子
と云ふ心よりの號なるべし。すべて世を好み遊ひの
二ツの流ありて。天地萬物乃そびへとしなる遊び
好とやらん人。此乃好ありハ心ゆるをゆるす記とて
傀儡師ハ宮のかたの中を好のまゝ。傀儡師ての鞦韆
寂寞たる郷の樵乃夕暮ハ。一曲しなふべし。桃と
いへども桃源よりさかや。翁も虎渓をすゝれさらば
猿を友の淵にも及べし。晉子が傾情に。阿山人が
我世に翁久しうして名残の旅乃日の字おもひ出ハ
赤橋も乃ミ同じ。烏帽子カキクケコたるべし
吾妻人が赤いきし乃ならハ。好に赤烏帽子のあらん
ものを發明しらざさ桃ハ桃花の一花ごとに柳ならの
人の好ハ柳乃あらき赤をもしばし集にまとうべし
那須大旅士跋を。

銀河ノ序

芭蕉

北陸道に行脚して。越後の國出雲崎といふ所に泊る。
彼佐渡がしまハ。海の面十八里。滄波を隔て。東西三
十五里に。よこおりふしたり。みねの嶮難谷の隈々
まで。さすがに手にとるばかりあざやかにみわたさる。

むべ此嶋は。黄金多く出て。あまねく世の寶となれ
ば。限りなき目出度嶋にて侍るを。大罪朝敵のたぐ
ひ。遠流せらるゝによりて。只おそろしき名の聞え
あるも。本意なき事におもひて。窓(マド)押開きて。暫時
の旅愁をいたはらむとするほど。日既に海に沈で。
月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きら／＼と
冴たるに。沖のかたより。波の音しば／＼はこびて。
たましひけづるがごとく。腸(ハラワタ)ちぎれて。そゞろに
かなしびきたれば。草の枕も定らず。墨の袂なに
ゆへとはなくて。しぼるばかりになむ侍る。

「あら海や佐渡に横たふあまの川

番椒ノ序

野坡

とうがらしの名を。南蛮がらしといへるぞ。かの治世。南
蛮よりて久しからし。しかるや。未詳。酸漿(ホウヅキ)子。天竺(?)寛つん
ハなかなかずいぶるに。おのがかたちを。ながめ人への。歓
ばくれなるなるべし。色やさかしからぬ名目ハ。酒が生得(ムニレツキ)
ろしつくる種は。天資しらばの児ざかしうらむべらうぞ
かまがおしをうらうや。石臺におきて秋さく。竹格の端(ハシ)に
よるにあるハ。上ておち仕合なれど。ともすれば。雷鉢(スリバチ)の生涯
ぬき洞鍋(ンベ)に培(ツチカイ)まで中神のもつき。二階のつまに。おかしきた
但花をまちのよ侍るし。あやうきを見て侍るを。胡よのうらみ

さらバ八盃もしおもハ酒太りさハかづら鮭つり鰹乃益
鸚鵡よかしこさ迄て貧乏樽の口拭うたみされとなさも。
不食常用茶附。ふ器これもさら純。お可くハ奴僕豆腐の
味噌なふのさとを見ゆるを第一乃最上とせらる。かくいへ
ど。ある人小田原宿の酒る店は。店の亀助小嘗とよ。二合の一
あられハ。酒がおちとひと汁みのありし徳。下戸をもしらす
あつしと也へど。此中先らハべなりもあらず恋しし。今ハ
なる人ぞ。ロイ世をさつきつまパたよし君しとも知れむべう。
など。かくさ消え乃浅茶かうもと。小序をとす此ふ。

石臺を洗ひし杯とてすゞや 蕃椒